



寺院跡（現在は観光遺跡）プラ・ブラン・サム・ヨート (Phra Prang Sam Yot) での集合写真。2007年12月9日撮影。



<http://www.tochigi-edu.ed.jp/tochigikogyo/>  
栃木県立栃木工業高等学校

# 十代から始められる、国際貢献のかたち

## ——コミュニケーション・ツールとしてのボランティア

高校生がタイにおもむき、車いすの修理を行なう。栃木工業高校国際ボランティアネットワークが始めた国際貢献は今年19回目を迎える。初めの小さなチャレンジは自然と大きなネットワークへ広がり、1999年にはタイ王国労働福祉省より感謝の盾が授与されるほどのものに。十代の生徒たちが海外で何ができるのか？ 何ができないのか？



# 言葉は人と人との間に、 心の壁を作らない

——タイ人現地スタッフの言葉



現地施設でタイ人と作業する大塚さん。黄色のシャツの3人がタイ人。

## 国際貢献で 得られたもの

2007年12月8日から15日。タイ農村部ロップリにある労働技術開発センターで彼らの車いす修理活動が始まった。参加生徒は14人にOB1人。

そこで感じたことは生徒たちによってさまざまだ。

**大塚君**「コミュニケーションに言葉は関係ない、と感じると同時に、ちゃんと話せないとコミュニケーションが一方通行になる。例えば、修理とかがうまくいかないし」

**渡沼君**「日本人とは違ったタイ人の心のやさしさ」

**廣瀬君**「仲間と協力することの大切さ。それとタイは日本よりも時間の感覚がゆったりしていると思った」

**小野君**「自分たちが何かしている時には向こうは『自分たちは何をすればいい?』と聞いてきたりして、積極的に関わってくる。しゃべっていても言葉が通じないのに、向こうの人たちは熱心に理解しようとしてくれる」

彼らの活動はラジオで放送されたり、新聞に載ったりなどして、現地の人たちに広く知られることになる。ある人たちはピックアップトラックを借りて、車いすを持ってくる。そのレンタル料は、彼らにとっては2日分の給料にあたるという。

負担は軽いはずだ。

渡沼君は言う。

「『何かをしてあげる』というよりも『一緒に何かをする』というスタンスなんです。一緒に修理をして、お互いの名前を覚えて、最後に笑顔で別れられたらいいなと思います」

彼らは皆、日本では味わうことのなかった充実感を体験したようだ。

**廣瀬君**「1週間仲間と何かをするということで、自分が成長できるんじゃないか、と思いました。実際行ってみて、自分の中では何か変わったんじゃないかと思っています」

**渡沼君**「今年はやめようかなと考えましたが、新しい出会いもどんどん広がっていくし、行けば何か得られるものがありますので、やっぱりやめられないかな〜」

同行した小倉先生は言う。

「もちろん本校でも全然興味を持たない生徒もいますが、それはそれでいいんです。野球やサッカーに打ち込むことも素晴らしいことですし。ただ、この活動に参加した子たちは絶対に後悔しないですね」

## 高校生がもたらす成果と ボランティアの本質

本来ボランティアが文字どおり「無償奉仕」である以上、成果を問うのは酷なの

かもしれない。とくに高校生の活動であればなおさらだ。が、あえて「成果」という点について、小倉先生に聞いてみた。

「現地で直せる車いすは限度がありますし、設備も十分じゃないですから、彼らはベストを尽くしますけど、完璧ではないです。ただ向こうで喜んでいてる人たちが実際にいますので、成果はあると思います」

生徒たちはどう感じているのだろう。小野君は言う。

「やっぱり笑顔じゃないですかね。与えられたし、与えることもできた。僕たちが交流をしていると、本当に心から笑顔で接してくれているのがわかります。心から接すれば双方で笑顔を得られるんじゃないかな」

小倉先生は言う。

「その点『空飛び車いす活動』については、こちらでじっくりと構えて作業できますので、具体的な成果じゃないかな」

栃木工業高校は「タイボランティア活動」に続き、「空飛び車いす活動」の前身となる活動を1993年にスタートする。1999年には軌道にのり、全国的な展開を始める。当初同校福祉機器製作部を中心に始まったこの活動も、現在では参加校が全国の工業高校65校に増加。2007年はタイ、インド、スリランカ、韓国など12カ国へ560台を寄贈し、累計では2942台。彼らの播いた小さな種はここまで大きく根を張り、果実



作業場には、修理を待つ車いすが山積みだ。



上左から栃木工業高校教諭/小倉幹宏(おぐら みきひろ)さん/機械科3年廣瀬史也(ひろせ ふみや)さん/電気科3年渡沼俊幸(わたぬま としゆき)さん/下左から機械科3年小野遼太郎(おの りょうたろう)さん/機械科3年大塚裕也(おおつか ゆうや)さん



を实らせている。

普段の福祉機器製作部の活動では、年間50~100台くらいを修理。通常修理は1人約1週間で1台のペース。現在、生徒22人が取り組む。

### Think globally, live locally

「サービ斯拉ーニング」という教育手法がある。地域社会でのさまざま奉仕活動(サービス)と学校教育(ラーニング)とを融合させ、「教室の知識と社会実践をリンクさせる」取り組みだ。欧米の教育現場では60年代後半から導入が進み、特にアメリカでは2004年時点、全米の約70%の学校でサービ斯拉ーニングが取り入れられている。タイボランティア活動はサービ斯拉ーニングの考え方に非常に近い。

彼らが異文化の中で社会奉仕をして得たもののひとつは、自分たちが住む日本を見る目であろう。

**大塚君**「日本の車いすは少し壊れただけで捨てちゃうんです。自分たちがタイで修理する車いすは、錆びたり手すりなくなったり、それくらいになるまで乗っているんです。日本は贅沢すぎる」

Think globally, live locally

若い彼らの目は、「大人」以上に現実を見据えているかもしれない。

今後継続していくための課題を小倉先生に聞いた。

「辛い多くの団体などが協力してくださっていますし、賞金などいただいているのでしばらくは大丈夫かなと思いますが、問題は現地でのスタッフですね。同じ人たちが18年付きっきりで面倒みてくれているんですよ。彼女たちがいなくなれば継続が危ぶまれます。だからお金の面以上に、人的な体制づくりが課題です」

小倉先生にこの活動の意義を聞いた。

「成果というのはあまり気にしていません。彼らにもボランティアしているというふうに思ってもらいたくなくて、逆にチャレンジャーだと思ってほしいんですよ。自分たちが学んでいる技術などが向こうにいったどこまで通用するか、ということを知ってほしいんですよ。」

それと技術で交流できるというのが工業高校生としてのウリなんです。やはりワイヤーブラシやスパナを持っている時が彼らが一番生き生きしていますし、そこでコミュニケーションがとれるんですよ」

技術というツールでいっしょに取り組む。お礼は笑顔。彼らが与えているのも、修理という具体的な作業以上に、若い日本人の屈託のない笑顔なのかもしれない。

Text by : 大藪健一

### 学社連携

同ボランティアは県教育委員会、同窓会、PTA、市社会福祉協議会、栃木西ロータリークラブ、国際ソロプチミスト栃木、「ウエルフェア会」(OB会)、「アジアの問題を考える会」など、地域の福祉関係団体や個人支援ボランティアの支援を受け、「学社連携」の中で展開されてきた。中古の車いすは関東甲信越の病院や福祉施設、各市の社会福祉協議会、個人などから寄贈される。この活動を、日本のNGOが日通航空、NCA(Nippon Cargo Air Lines)、航空会社の協力をえて寄贈先の国々のNGOに届ける。

### PROFILE

#### 栃木工業高校 国際ボランティアネットワーク

1991年、タイの福祉施設を訪問し、車いすを修理しながら現地の人たちと交流する「国際交流タイボランティア活動」が始まる。他に日本の中古の車いすを修理し、東南アジアを中心とした世界の人々に届ける「空飛ぶ車いす活動」も行なう。この中古車いすの修理活動はリサイクル運動とも結びつき、1999年度、全国リサイクル協会の「リサイクル協会賞」を受賞。2007年、第19回「毎日国際交流賞」、亜細亜大学より「アジア教育奨励最優秀賞」などを受賞。